

# 教 仁 名 聞

第13号  
(発行日)

2011年10月1日  
発行所：真宗大谷派念佛寺  
〒6638113 西宮市  
甲子園口2丁目7-20  
電話・FAX (0798)

63-4488  
(発行人) 土井紀明  
mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp  
http://www.eonet.ne.jp/~souan/

## 《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉  
毎月22日 午後2時始
- 〈念仏座談会〉 毎月  
2日と12日。午後3時始。
- 〈聖典学習会〉  
毎月6日午後7時始。
- 〈真宗入門講座〉毎月18日  
午後6時30分始。
- \* 8月は2日の念仏座談会と6  
日の聖典学習会以外は休み。

# 真宗における援助

今年の三月十一日の東北の

震災で二万人ほどの人が亡く  
なされた。この災害に真宗大  
谷派教団も支援すべく、何億  
円かの寄付金を集め、食料・  
日用品などの援助物資をトラ  
ックで何倍も運んだ。しかも  
震災への対応は敏速だった。  
戦後の大谷派教団が社会の諸  
問題にに応じていくという姿  
勢が実った一つの成果である  
と思う。

ただ、もし真宗教団が財物  
の援助でもってこと足れりと  
するならば、それは他の一般  
的な慈善団体と変わらない。真  
宗教団は真実の宗教を中核と  
する教団であるかぎり、被災  
者への物質的な援助に留まる  
ことはできないはずである。  
むしろ、真実の宗教でなくて  
はできないような大事なサポ  
ートがあるはずである。それ  
はどういう援助なのであろう  
か。

そのことについて、十五世

紀に出られた蓮如上人のこと  
が思われる。上人は各地で精  
力的に布教されたが、その時  
に「この里に子を喪える親  
はないか」と村々を訪ねて行  
かれたとお聞きしている。  
子供を喪うような悲しい  
目に遭った人たちが、そういう  
ような大きな喪失体験をされ  
た人たちをことにお念仏の教  
えを説くべき人とされたよう  
である。これは何を意味する  
のであろうか。

おそらくそれは反面、平穩  
無事の人たちはなかなか仏法  
を説いても我が身のこととし  
て真剣に聞こうとしない、と  
いう現実があったのではなか  
らうか。それは現代も同じで  
ある。

しかるに、子どもを喪った  
親たち、そういう人は仏法を  
真剣に聞こうとする、と経験  
的に上人は感じておられたの  
ではなからうか。なぜであ  
らうか。

それは、人生には思いもか

けない出来事が起こり大事な

ものを一瞬にして失うことが  
ある。子どもを失い愛する夫  
や妻をあつという間に失う。  
あるいは二度と立って歩けな  
いほど身体を大きく損ねた  
り、火事や水害などにあつて  
ほとんどの財産を一度に失う  
などの災厄に見舞われること  
がある。こんどの東北の震災  
ではこのような人たちが沢山  
いる。

こういう喪失体験をした  
時、人はおそいかかった過酷  
で不条理ともいえる運命を前  
にして、「人生とは一体何な  
のか」「なぜこんな辛い目を  
してまで生きねばならないの  
か」「なんのために生きるの  
か」などという、いわば「何  
もかもわけがわからなくなっ  
てしまった」というような事  
態になりかねない。もちろん  
そうはならない人も多いだろ  
う。しかし必ず、少数であつ  
ても人生のこうした不条理の  
前に呆然とする人たちがいる

ものである。

しかもこういう経験は特別  
な少数の人のみに起こるので  
はなく、私たちにも小なりと  
いえども起こりうるのであ  
る。

たとえば親しい人の死別の  
時などである。葬式がすんで  
火葬場に非常に親しかった人  
のご遺体を運び、二、三時間  
ほどしてお骨を拾いに行く。  
そうすると釜が開いてザァー  
と白いお骨が出てくる。その  
時、愛する人の激変した姿に  
一瞬は誰しも言葉を失う。何  
とも言えない、人のいのちの  
不可解さ、説明のしようのな  
い不条理さ、あるいは言いよ  
うのない空しさを少しなりと  
も感じるのではなからうか。

「ああ、あの愛しい人はどう  
なったのか。どこへいったの  
か。いったいこれはどういう  
ことなのか」と。愛する人が  
死んで灰になったということ  
は決して当たり前のことでは

## 《 念佛寺報恩講 》

十二月二十二日 (午後二時始)

ご講師

石川県能美郡

藤原千佳子師

# 正信偈に学ぶ問答

## (三十四)

### 天親菩薩造論説

### 帰命無碍光如来

### 依修多羅顯真実

### 光闡横超大誓願

なく、極めて不可解であり、何とも言いようのないXを突きつけられる経験である。

しかし、多くの人は時の過ぎゆく中でまた日常生活に戻っていき、日々の忙しさに追われる。目の前に突きつけられたせつかくの大事な問いもそれ以上問われることなく流れ去っていく。

確かに、多くの人は元の暮らしに一日でも早く戻ろうと〈前向き〉に努力することに忙しいかもしれない。そしてこういう人たちの〈がんばる〉姿は、今回の震災でもマスクミでしばしば取り上げられる。

しかし、愛する人を失い財産を失い仕事を失った多くの人たちの中に「人生とはいったい何なのか、あまりにも不条理すぎる、分からなくなつた」という人たちがいるに違いない。かれらは、問題意識がそれほど明確になつていなくても、どうにも答えの見えない悲哀や空しさを感じているであろう。そういう人たちはなんともいえないやりきれなさで日々送りながらも、人にも語れずそれを胸におさめている場合が多い。

しかし、こういう人こそ、むしろ真実に向き合う縁が熟している人であると思う。蓮如上人が「子どもを亡くした母はいないか」と尋ねていかれたのは、そういう人は真実である縁が身近にきている人であると思われたからであろう。

こんどの震災で、多くの遺族・親族の中に、このような人生の不条理や不可解に苦しんでいる人たちがきつといるに違いない。そういう人たちにこそ、お念仏の教えにであう縁が熟している人たちであるといつていいし、そういう人たちにお念仏の教えをお伝えすることができれば、それこそ真宗教団としての真の援助であり、また教団の存在意義でもある。

お念仏の教えは、このような生きる意味を見失った人たちに、「生の依る処であり死して帰する処」である浄土を説き、そして人生の方向を浄土と示し、浄土の真実をいただいて生きることが人生の真実の意味であることを語るのである。

(了)

書き下し文(天親菩薩、論を造りて説かく、無碍光如来に帰命したてまつる。修多羅に依つて真実を顯して、横超の大誓願を光闡す)

現代語訳(天親菩薩は、『浄土論』を著して、「無碍光如来に帰命したてまつる」と述べられた。浄土の經典にもとづいて阿弥陀仏のまことをあらわされ、横超のすぐれた誓願を広くお示しになった)

\*

D「阿弥陀如来のことを天親菩薩は無碍光如来と讃え、その如来に帰命して安楽浄土に生まれたいと願われたのです。それで聖人は、天親菩薩のような勝れた菩薩でさえ阿弥陀仏に帰依して浄土に生まれたいと願われたのを有難いと思われたのではないでしょ

うか。そして天親菩薩のような大乘仏教を代表する勝れたお方がこのように信仰告白されたことは、浄土の教えは大乗仏教の精華であり本道であるとの認識を深められたのではないでしょうか

N「天親菩薩ご自身が浄土に生まれたいと願われたのは、単に一人の人の出来事にとどまらず、仏教の歴史の上で大きな意味があるのですね。さて、天親菩薩が阿弥陀仏のことを無碍光如来と言われたのはどうしてなのでしょうか」

D「それについて聖人は、阿弥陀仏の無量のお徳はどれも尊いけれども、ことに無碍光のお徳が尊く、しかも天親菩薩もこの無碍光の徳を讃歎されておられることを大変有難いと思われたのでしょうか」

N「無碍光の徳とは」

D「これは今まで何度も申しましたが、無碍光とは私たちの罪や障りにさまたげられることなく救いたもうお徳のこと

とです。阿弥陀仏は人のどのような姿も行いも、いわば人の善悪・淨穢・賢愚・貴賤などを一切問題にしない、いわば人の存在そのものをそのまま受けとつて助けて下さる無碍のお徳を具えておられること。それゆえに私のような宿業に縛られ、煩惱の始末が付かず、愚かで、性質の粗悪な凡夫が、ありべのまままで阿弥陀如来の無碍光のお徳によって受けとられ助けられて浄土に至らしていただく。こうした無碍の徳ある仏を天親菩薩は無碍光如来といい、その無碍光如来に帰命すると仰せ下さっている、とのお心でありましょう」

N「帰命するとは」

D「ここでは、したがつ、たのむ、おまかせする、身をゆだねる、ということですよ」

N「よく〈阿弥陀如来におまかせする〉と簡単にお願いしますけど、阿弥陀仏におまかせするというのがなかなかできませんね」

D「自分がどうおまかせしたらいいのかとか、どうしたらおまかせできるのかと、自分のあり様にいつまでも目を向けていてはおまかせはできません

いものです。自分のあり方ばかりを問題にしていることは、それはまだ自分の方からおまかせできるように思っているからです。おまかせなどとてもできる私ではないとはつきりと知ることです。そして、そんな無信無能の私に南無阿弥陀仏はどう仰せ下さっているかをよく聞くことが大事です。そうするとおまかせするもしないもない、へああこんな者を」と、阿弥陀仏の

広大なお助けを有難くお聞かせいただくばかりです。この他に無碍光如来に帰命するということはありません」

N「では次の〈横超の大誓願〉とはどういうことですか。それはもともとどこに示されているのですか」

D「まずどこに示されているかというと、修多羅いわゆる經典に説かれています」

N「修多羅に説かれていますというところが大事なことなのですね」

D「ええ、經典は真実を悟られた仏（釈迦）が真実をお説きになったものです。いわゆる真実を了解したお方が真実に迷える凡夫に真実を説かれたのが修多羅で、ここでいわ

れる修多羅は仏説無量寿經のことです」

N「真実に目覚めた仏陀が真実を説かれたもの、それが修多羅なのですね」

D「ええですから、仏陀の言葉は、私たちが心して、へりくだって、心から信頼して、お聞かせいただくべきものなの

N「お経の言葉は謙虚に聞かせていただくものなのですね」

D「そうなんです。仏の言葉を軽んじますと、いつまでも自分の考えから出られ

N「仏説を軽んじるということとは裏から言えば自分の考えに自信があるのですね」

D「ええそうです。凡夫の自信は、仏説を聞いても傲慢心で聞いてしまうのです」

N「仏説を聞く場合、自分の考えに自信や誇りをもってすることは問題なのですね」

D「ええ、現代は学校やテレビ・新聞などで沢山の知識や教養を身につけます。それはそれでいいのですが、しかし

いろいろな知識や情報を知ることによって人は傲慢になりやすいのです。知らず知らず（私は物事を知っている）という

慢心が強くなり、ため込んだ知識と知性で世間のことをいろいろ批評するようになり

す。そしてますます（我がしこし）という傲慢がつのってきます。これが現代人の特徴

で、（私は愚か者だ）という人はほとんどいませんね」

N「実際、私なども（私は愚かで何も分かってない人間だ）とは思っていないです」

D「先日テレビでアメリカのアーミッシュの人たちのことを放映していました。かれらは独自の共同体をつくり、キリスト教に順った信仰深い生活

を維持しています。そして彼らは学校は中学までしか行かないし、親は行かせないよう

にしているとのこと。なぜかというとうと高等教育を受ける

けると人は傲慢になり、神を信じる生活から離れてしまう

から、ということでした。見えてなるほどと思いましたが、確かにそういう面がありますね」

N「傲慢になると、お経や聖典の言葉を素直に聞かなくなる

のですね」

D「そうですね。こうした傲慢心でもって經典や聖典を読んでも、（お経ではそう書いてあっても、私はそうは思わ

ない）とか（お経のいつていることは古くて現代には間に合わない）とか（釈迦もなかなかいいことを言っている）

などと思う。どこまでも自分の考えを元にしますから、お経を読んでも自分の考えに合

う部分しか受け入れません。ですから深い悟りの智慧から説かれたお経の真理に触れる

ことができないのです」

N「自分の迷える知性で裁いてしまい、どこまでも自分の考えにとどまってしまうので

ですね」

D「ええ、そうなんです。人は自分の考えから一歩も出られ

ませんから、当然心は開かれ

ません。現代人がせっかく仏教にふれてもそれ以上進まないのは自分の知性にたい

する高ぶりによってさえぎられるからだと思えます。ですからたとえ高等教育を受けて豊

富な知識をもつていても、經典を読むときは自分の考えを先立てずに謙虚に読むことが

大切ですね」

越えるような形で至ることです。横さまというのは、凡夫の考えている常識的な順序

ではなくて、常識を越えた不思議な働きによってということ

を表しています。また超とは、だんだんとではなく一挙に飛び越えるようなのをい

います。如来の大いなる誓願の不思議な働きによって、凡夫が迷いの世界から悟りの世界

（浄土）へ、速やかに至ることが

できる、そういう様を横超といい、その横超の大誓願を天親菩薩は光闡された、

いわれるのです」

N「阿弥陀仏の偉大な誓願は、凡夫がすぐに納得できるような常識的な話ではなくて、不可思議な大悲の救いの働き

なのです。だから凡夫の積み上げた常識や知識をたのみにせず、弥陀の本願の前では、

頭を下げてこれを素直に聞くことが肝要なのですね。天才であつた天親菩薩ですらこの不思議な誓願を説かれた

經典に素直に順い、ご自身も安楽浄土に生まれたいと願われた。いわんや愚かなお互い

はそうあるべきなのですね」

D「ええそうです」（了）

# 信心夜話

『一蓮院談合録より』(9)

(太字の文が一蓮院秀存師の言葉です。カ  
ッコ内は私の所感)

この度の往生は算用合わせて落ちつくではない。算用は親のあな  
たがあわせてくださるから、我等  
の手元は算用のあわぬなりでお助  
けを信ずるのじゃ。

(ことわざに「算用合うて銭たらず」と  
いう言葉があるが、仏になるにはそれに  
見合った修行の功德を積まねばならな  
い。それでこそ算用が合う。ところが私  
たちに仏になるだけの功德善根があるか  
という、これが全くない。浄土に生ま  
れて仏になるのに必要な功德善根を積ん  
で算用を合わせようとしても、地獄行き  
の種は造っても浄土に生まれる種は少し  
も造れぬ。それを私たちに先立って知っ  
て下さって、私たちに代わって浄土に生  
まれて仏になる種を阿弥陀仏の方で仕上  
げて下さり、これを私たちに南無阿弥陀  
仏として与えて下さる。阿弥陀仏の与え  
て下さる功德(名号)をいただくことに  
よって、初めて私たちが仏になる算用が  
合う。私の方では全く算用があわぬけ  
れども、与えて下さる南無阿弥陀仏で算用  
を合わせて下さって、浄土に生まれさせ  
ていただくのである。私の側にはまった

く算用が合わぬな  
りて助けていただ  
くのである。にも  
かかわらず、浄土  
に生まれる算用を  
私の側で少しなり  
とも合わせようと  
はからう。それで、いつまでたっても落  
ちつかないのである)

お助けを聞きた上に、信じ心や  
たのみ心をながめるとながめざる  
ものがあるべし。予は之をながめ  
る方なれども往生の一段のさわり  
となるや否やと、雲溪師に向かい  
たれば、師いわく、ながめる心を  
すててながめぬ心を買いとるは自  
力なり。そのままのお助けなれば  
なりと。

(阿弥陀仏の「まるまる助ける」という  
仰せを聞き受けた上に、なお自分の信じ  
心やたのみ心をながめてしまうがこれは  
往生のさまざまげになるかどうか、と一蓮  
院師が雲溪師に問うているが、これは何  
を意味しているのであろうか。一蓮院師  
はすでに阿弥陀仏の仰せを信じた人であ  
ることは疑いようがない。とするとこ  
こで、自分の心に信じ心やたのみ心をな  
がめるといふのは、信じた上でなおも、  
信じたしるしを自分の心の中にながめよ  
うとし、それによってお助けを確認しよ  
うとする計らいがやまぬということはい  
われるのであろう。こういう計らいが起  
きて普通は問題にしないが、一蓮院師

にとつて往生の問題は極めて大事な問題  
なので、師は少しでも不審があるとそれ  
を問題にされるのである。これは一蓮院  
師の信心があやふやだからではなくて、  
どこまでも往生浄土は一大事ゆえにゆる  
がせにしたまわない師の求道心の深さか  
らくるのである。実際、信じた上にもな  
お自分の信じ心やたのみ心の有無や浅い  
深いをとかく確認したくなり、法を喜ぶ  
心や有難い心が起こっていると「これで  
こそ」と思い、有難い心や喜びが乏しい  
と「さてこれでいいのかな」という思い  
がとかく起こるものである。一蓮院師は、  
それをあえて問題にして雲溪師にたずね  
られるのである。

こういう問題は『歎異抄』第九章の唯  
円房の不審と通じるものがある。ここ  
の唯円房は、阿弥陀仏に助けられて浄土  
に参らせていただくことに疑いはないけ  
れども、「喜びが少ない」とか「いそぎ  
浄土に参りたいような心がない」のをな  
がめて、こんな喜びの薄いことではないの  
であろうか、浄土にいそぎまいりたいよ  
うな心がない我が心で本当にいいのであ  
ろうか、との不審が起こる。まるまる助  
けるといふ本願には疑いがないけれど  
も、なおもそこに不審というものが起こ  
ってどうもすつきりしないというのであ  
る。これは本願を信じた上にもなお自分  
のすがたをながめ、弥陀を信じたしるし  
が自分には乏しいことが気になるのであ  
る。弥陀の本願に助けられたのであるが、  
これでいいのであろうかという不審であ  
る。これは本願を信じた上での不審であ  
って、本願を信じていない中での疑いや  
不審とは違う。これは混同してはならな  
い。  
こういう信じた上にも不審をもつのは

やはり真剣だからであり、往生の問題が  
一大事だからである。そして唯円房の場  
合、それは煩惱の仕業であり、阿弥陀仏  
の本願はそんな煩惱具足の者をこそ助け  
ずにはおかないという大悲なのだ、聖  
人からお聞きになつて、「はいよいよ大悲  
大願はたのもしく、往生は決定と存じ候」  
と、不審を縁としてさらに本願を信ずる  
信心を深めている。これは信心がダイナ  
ミックに唯円房の上に生きて働いている  
証拠である。

一蓮院師は自分の心を振り返り見て、自分  
の心の中に信心の色やしるしを確かめよ  
うとしれば計らう、そういう自分を問  
題にし、「自分の心をながめて救いを確  
認しよう」と計らうのは往生のさわりにな  
るのであろうか」と雲溪師に問うておられ  
る。答えは一蓮院師は分かっている。分  
かっているが、へりくだってあえて師友に  
問うておられる。その答えが「ながめる  
心を離れようとするのもまた自力の計ら  
いである。そのようなながめる計らいの  
あるままを弥陀は助けたもうのである」  
との雲溪師の言葉を一蓮院師は有難いと  
喜ばれたのである。一蓮院師が自分自身  
への問法にいかにも熱心で真面目に心がけ  
ておられてかがよくうかがえる)

(了)

《真宗入門講座》  
(お勤め練習と正信偈の学習)  
毎月十八日(午後六時半始)  
担当(副住職) 土井尚存